

大正期恋愛書簡文の表現研究〈その1〉

—— 文例の紹介・分析 ——

みょう が まどか
茗 荷 円

1. はじめに

書簡文は実用文の一種であるが、その中でも、用を弁じるのが中心の実用書簡文と、必ずしもそうとは言えない、自らの情愛を述べるのが中心の、「情愛書簡文」⁽¹⁾と呼ばれる書簡文がある。両者は性質が異なり、前者には簡潔さが求められるのに対し、後者には「情愛手紙は必ずしも簡潔を必要と致しません。下手の長談議にわたらないやうに或る程度まで自分の情愛を細々と叙る必要があります。」(『若き女の情愛手紙』大正5年)とあるように、必ずしも簡潔さは必要とされない。本研究の対象である恋愛書簡文(ラブレター)は後者に含まれ、大正期において、恋愛書簡文の文例が含まれる「情愛書簡文例集」⁽²⁾なるものが数多く出版された。茗荷(2023)では上記資料の紹介・観察を行うとともに、大正デモクラシーをはじめとする歴史的背景や、文体史・文学史的な潮流と関連づけながら、それらの特徴、出版意図、役割や位置付け等を示した。そして情愛書簡文例集は、大正期を代表する史料の一つとして注視に値するものと結論づけた。

またそこではとくに口語文体による恋愛書簡文の表現において、文末表現に特徴があること、修辞・技巧に富んでいること等を指摘したが、紙幅の都合上その細部までには至れず、以後の検討課題とした。これらの課題のうち、本稿では表現研究の〈その1〉として、「情愛書簡文例集」に収められている恋愛書簡文の文例の紹介およびそれらの表現の分析を試みたい。なお、本稿の研究対象とする文例は、当時の書簡文体には男女差があるため、書き手が女性である恋愛書簡文とする。

2. 大正期における口語文体による恋愛書簡文

書簡文の口語体化は、明治後期～大正期にかけて広がりを見せ、昭和期で定着したとされている(橘(1977)、茗荷(2017))。それまでの書簡文は候文体が主流であった。したがって、大正期において、口語文体の書簡文は、新しく成った文体で、成熟したものとは

言い難く、「現代の口語文が試みられてからまだ日が浅いゆゑ、その練習工夫の至らぬため、目下の口語文には、尚今後の研究に待つて大成せねばならぬ余地が大分あります。」（『婦人よろづの手紙』大正6年）とあるように、改善の余地が多かった。

口語文体の最大の特徴は、旧来の候文体では限界のあった、感情を細々と表現出来ることであるが、「自分の情愛を細々と叙る」のが中心である情愛書簡文については、「文章は拙劣でもよいです、飾らない、隠さない偽らない、自分の真実の情愛を認めなさい。これが情愛手紙の容易く書ける秘訣であると共に先方の相手に深い――感動を与える一番の近道であります。」（『若き女の情愛手紙』）という意見がある一方で、「文章が、読む者に好感を与へ、喜びを与へ、感興を与へ、或は感激を与へ、興奮を与える事は、一に行文の如何にある。それが為文章の組立の如何を考へ、云ひ廻しその如何に思ひを練る事、是れ即ち云ひ換へれば技巧の研究である。」（『新しき婦人の手紙』大正8年）のように、技巧の必要性を説くものも複数見られる。

このような口語体による情愛書簡文に、「恋愛」の要素が加わったものが恋愛書簡文である。大正期は、「大正浪漫」という言葉があるように、大正デモクラシーを背景とした自由恋愛思想や恋愛機運の高まりによって、一般人にとって「恋愛」という概念が、それ以前よりも身近となった時期である。実際に経験するか否かは別として、恋愛において、相手との意思疎通を図るために必然的に生じてくるものの一つが書簡文である。とはいえ、その文例に触れる機会というものは、それまでは恐らく小説の中くらいに留まっていたであろう。一般人にとって、一般人による（とされる）リアリティのある恋愛書簡文（注2参照）というものは「未知」に近いものであったと思われる。またとりわけ女性にとっては男性に自ら情愛を綴るという行為は、芸者といった玄人、一部の女流作家や著名人、「発展家」と称される女性等を除いては、ほとんどなかったことである。当時の女性の社会的立場を考慮すると、女性が意中の男性に恋愛書簡を書くという行為は、非常に先鋭的・斬新であり、かつ大胆な試みであったであろう。

このように、「口語文体」という新しさと「恋愛」という新しさを併せ持った大正期の恋愛書簡文は、当時非常に新しい種類の書簡文であったと考えられる。そこに「一般女性」という要素が加われば、時代の最先端の書簡文と言っても過言ではないだろう。先端的ゆえに、内容のほか、表現においても手探りの状態であり、様々な試行錯誤がされていたことが想定される。新しく成った口語文体で、女性が意中の男性に、いかに情愛を綴るか。そこに表れている修辞・技巧について検討することを、本研究の目的とする。

3. 新しい「口語文体」で、いかに「情」を伝えるか

一般的に、恋愛書簡文が持つとみなされる要素として、親しみ、親密性、強い感情の発露、生々しさや臨場感、当事者意識の喚起、場合によっては窮迫や詰問、緊迫感、などが挙げられよう。また当時の女性の社会的立場から、女性が書き手となると、少々の媚態、含みや婉曲、ためらい、恥じらい、迷い、さらには男性への判断の委ね、なども想定される。

本稿では、女性の書く恋愛書簡文の持つ要素を、1. 親密性、親しみ、媚態、2. 強い感情の発露、3. 当事者意識の喚起、窮迫、4. 生々しさ、リアリティ、5. 含み、恥じらい、ためらい、控えめながらも主張、6. 迷い、男性への判断の委ね、の6つに整理し、その要素別に、どのような修辭・技巧が見られるか、以下の7種の情愛書簡文例集から恋愛書簡文の文例を挙げて具体的にみてゆくこととする。これらの資料は、数ある情愛書簡文例集の中で、比較的、一般女性から意中の男性もしくはかつてそうであった男性への口語文体による恋愛書簡文が多く見られるものである⁽³⁾。また著編者の性別の割合が同等程度になるよう配慮した。

- ① 『現代式 男と女の手紙』（藤澤紫浪著／大正2年）
- ② 『恋ひに悩める 新らしき女の手紙』（磯野芳子 編／大正2年）
- ③ 『秘密の手紙』（岩田烏山著／大正6年）
- ④ 『胸に秘めたる 愛の手紙』（永井湘南著（編））／大正8年）
- ⑤ 『恋の告白 手紙ロマンス』（大島三枝子著／大正9年）
- ⑥ 『多情多恨 愛の手紙』（花上美代子編／大正9年）
- ⑦ 『応用自在 男女情熱の手紙』（紀室公民著／大正12年）

なお、次項3-1～3-6までに示す文例の中には、取り挙げている事項以外の修辭・技巧も見られるが、各事項の表現効果を分かりやすくするため、各事項を説明する際は、その事項以外のことについては極力触れないこととする。また書簡文の内容や場面については、必要に応じて記す。

3-1. 親密性、親しみ、媚態

3-1-1. 文末表現

口語文体による恋愛書簡文の文末表現は、おおむねデスマス体、ゴザイマス体のような

敬体を基調とし、中には「てよだわ言葉」と言われる、女性特有の終助詞（以下、「女性系終助詞」と呼ぶ）が付されているものもある。女性系終助詞が加わることで、会話のような親しさや親密感が表現されている。以下の例のようなものである。

【例 1】

（略）

あれから、私は、泣きつゝ渚を辿つて帰りました。月光を浴びて、翼を返してゐました鴟——海——渚——浪、あゝその浪の音も、今暫く見ることができぬと思つて、悲しくなりましたわ。S 様、お優しいおたよりをお待ちいたしております。

（①「浜の小村から」）

上のような例の他には、次のように、常体と敬体が入り混じったものも見られ、より会話に近く、砕けた、親しみのある印象を受ける。また、とくに常体の文末には女性系終助詞が付されていることが多く、それにより、常体の堅さや待遇の度合いの低さ、ぞんざいさ等を和らげ、女性らしい⁽⁴⁾、柔らかな印象をもたらしめている。少々の媚態も表現されている。また常体と敬体を交えることで、単調さから抜け出し、緩急をも生み出している。

【例 2】（全文）

あなた。今何をしてゐらつしやるの？ 私はあなただけを思つているのに。あなはさうじゃあないのね。

一寸口惜しい！ 可愛さうではない事？

私はあんまり派手過ぎて、人目につきやすくていけませんね。桃色の日傘さん（ママ）が持つて、でもちみなもの持つてゐないのだから、仕方がないわ。我慢しておつき合ください。

今度お目にかゝれても、遠い先の事ね。お別れすると、すぐ又逢たくなりますから困りますわ…………

（⑦「其第三信、直ぐ逢ひたくなるわ」）

上の例よりさらに砕けた、常体に女性系終助詞を付しただけの文末が全文の半数以上を占めているものもある。次の書簡文は、全 19 文のうち、デスマス体＋女性系終助詞が 4 文、体言止めが 1 文、名前の呼びかけが 3 文で、あとは全て常体＋女性系終助詞で書かれており、会話に近いものといえる。

【例3】

(略)

Yさん。

妾此頃スツカリ悲観してゐるの。ザツクバランな事を云ふと、実は妾はYさん貴郎の奥さんになる気でゐたのよ。その積りで、浅草にゐた時分には、一切の誘惑を斥けてゐたの。所がYさんもXさん見たいに嘘つきで、チヤンと立派な奥さんがあるのですもの。歌劇女優一人をトウへ失恋の淵に抛り込むで仕舞つたのだわ。

(略)

(⑤「鎌倉から(櫻子から)」)

これらの例の中で注目しておきたいのは、常体に、女性系終助詞の付された文末である。敬体+女性系終助詞の場合、丁寧さに女性性が加わり、より女性らしい印象になる。またこのような表現は、実用書簡文の模範例にも見られるものである。常体の文末は、書き手と読み手の待遇関係を「上下・親疎」で考えると、通常は「同等または目下・親しい」間柄で用いられるものであり、当時、このような文末は、親しい間柄の男性同士もしくは男性から女性への書簡文で使用されるものであった。女性の場合、男性宛ての書簡において、常体のみの文末を用いると、いささか失礼で、粗野・ぞんざいな印象になるだろう。しかし常体の文末に、女性系終助詞を付すことで、常体での「粗野さ・ぞんざいさ」を軽減し、「親しさ」を保ちながらも女性らしさが加わり、親密ながらも少し丁寧で女性らしさを生じさせることが可能となる。

また、同じ文末表現で統一すると、書き手と読み手の距離感は一定で、やや平坦な印象となるが、敬体のみの文末、敬体+女性系終助詞の文末、常体+女性系終助詞の文末の3種を混合して用いることで、書き手と読み手の距離感に変化をもたらし、読み手の男性としては感情に起伏が生じ、時には揺さぶられることもあろう。このような働きから考えると、文末の不統一は、恋愛書簡文としては技巧的であると思われる。これら多様な文末表現を用いて微妙なニュアンスまでも表現できるのは、口語文体ならでのことであり、従来の候文体では不可能なことである。

3-1-2. 呼びかけの使用、またその繰り返し

親密性や親しさを表現するための工夫として、呼びかけ表現も散見される。これは、書簡文冒頭を相手の名前や「あなた」の呼びかけで始めるもの(【例2】参照)⁽⁵⁾、一通の中に1カ所のみ使用されているもの、何度も繰り返されているもの、感動詞「ねえ」や

「ね、」などと共に用いられているものなどが見られる。一通の中に1カ所のみ使用されている場合は、重要な箇所での使用が目立つ。

次の例は、全26文中、1カ所のみで使用が見られるものである。地元が同じであった意中の男性が、事情により一家で東京へ移り住むことになった。別れてから1年、女性は孤独感に陥り、自分を東京に呼び寄せ救ってほしいと頼む。その直前に呼びかけが使用されている。

【例4】

貴君とお別れした思ひ出の秋が又来しました。もう1年になるんですもの。

(略)

只々貴君の御心次第。ね、鷹雄さん、此の悶え苦しむ女を救つて下さいまし。せつなる心をおくみ下さつて、都に呼びよせて下さいまし。

(略)

(④「其三 別れし人に」)

次の例は、書簡文の末尾に1回のみ使用が見られた例である。呼びかけの直前の2文が、最も重要な箇所である。

【例5】

別れても、二人の中に山があつても海があつても、二人の心はまだ離れてゐませんわ。別れた！ と云つて下さいますな。

(略)

私わね。あなたを思ふ度に、明るい、嬉しい、ふつくりした心になります。別れたのではない。もうそんな事は言つて下さいますな。ね、A様！……。

(②「別れし男へ」)

次の例は、一通の中でおよそ1段落ごとに呼びかけが見られるものである。熱海に滞在している女性が、意中の男性に熱海へ遊びに来るよう誘っている書簡である。1回のみの使用例とは違い、とくに重要な箇所では用いられているというわけではないが、一定の文量ごとに名前をくり返し呼びかけることで、いつも側にいるような親密感を生じさせることが出来よう。

【例 6】

秀夫さま……。

新しい春が来ました。御目出たう御座います。

(略／3行)

秀夫さま、是非滞在している中に一度おいで遊ばせ、妹も来る筈ですから三人して歌留多でも取りませう。

秀夫さま……。

熱海に於ける妾の日課は、朝起きて透き徹るやうな温泉に浸かる事と、書物を読み耽ける事と、そして夜に入つてからお琴を調べる事の外何ありません。

(略／6行)

秀夫さま……。

片割月が相模灘の水に金色の影を映す宵妾は一人で海岸をそゞろ歩きました。

(略／3行)

秀夫さま……。

『金色夜叉』のお宮と貫一の別れた場所は、此熱海で、時も同じ一月です。

(略／6行)

((⑥「熱海から」)

3-2. 強い感情の発露

3-2-1. 誇張・強調

情愛書簡文例集の「はしがき」には、掲載されている書簡文について、「御身らが抑へんと欲して抑ふる能はざる胸底の秘奥」(『若き人々の書ける 多情多恨の手紙』)、「血を吐くやうな苦悩を訴へたもの」「甘き恋に酔ふて可憐の少女の玉章」(『恋ひに悩める 新らしき女の手紙』)などとの形容がある。書簡の内容に乗じて、誇張・強調と思われる表現が、非常に多く見られた。それらは、「急に強く――貴方に逢ひたくなつて、矢も楯もたまらない。」(③「私も淋しい」)のような、比喩を使った慣習的な表現、それに反復、対句、列挙などが加わったものや、これらの修辭を組み合わせる使用することで、より誇張を増幅させている例も見られる。また、「呪い」「悶え」「血」「死」「屍」「神」「運命」などの、少々大仰な語彙と共に使用することにより、さらに誇張を増幅させている例も見られた。文例を、以下に8例示す。

次の2例は、同じ「血」を用いて、比喩による誇張や強調がされているものである。前者は自らの不貞のせいで夫に勘当された妻が、臨終間際に許しを乞うという書簡(これま

でに夫には何度も手紙を出しているが、全て拒絶され続けてきている)、後者は懇意になった男性に箱根への旅行を持ち掛け、断られた女性が、恋の再燃を持ちかける書簡である。

【例 7】

(略)

一度、二度、三度、四度、拙い手紙ながらも真心を籠め、血の涙を絞つて認めたものを差上げましたのですが、いつも――御手にだに触れさせたまはず、その都度、その儘で御返し下さる御心強さ。

(略)

(③「この世の名残り」)

無念さ、悔恨、懺悔の様を「血の涙」で表現している。

【例 8】

(略)

函嶺に錦織りなす紅葉のやうに、赤い赤い御心を持つておいでならば、妾が鳶屋に滞在してゐる中に、此地へ御いで遊ばせ。そしてお互ひの心臓に湧き返つてゐる血のやうな紅葉を見やうではありませぬか。

(⑤「紅葉の箱根より (千鶴子から)」)

紅葉を「血」にたとえ、湧き上がる情熱を強調している。

次の例は、出兵することになった意中の男性に、心変わりをしないことを固く誓う女性の書簡である。

【例 9】

(略)

石が水に浮び、泡が底に沈む事があるとも、妾の心は変りませぬ 世が覆へらうとも。

天地が裂けやうとも、妾の心の中には貴郎の外は何ものを宿ませぬ。

鉄よりも堅い心を以て二年の間を操守します。

(略)

(⑥「入営を控へて」の返事)

「どんなに有り得ないことが起こっても」心変わりしないという強い気持ちを、漸層を用いながら、比喩で表現し、誇張している。さらにそれらを「～とも」という反復表現で積みかけることで、より強調している。そして再度、心を「鉄」にたとえて誓いの固さを示している。

上の例の比喩は「石が水に浮び、泡が底に沈む」、「世が覆へる、天地が裂ける」「鉄よりも堅い」など、慣習的な表現であるが、次のように、慣習をやや逸脱している比喩による誇張も見られる。次の例は、家庭の経済事情により、親の決めた見合い相手と結婚せねばならなくなった女性が、懇意にし、結婚を誓ってくれていた男性に事情を説明し、詫びる書簡である。

【例 10】

(略)

怒られ呪はれても、それは私から出た事、私はその怒りの^ま目標となり、呪ひの^ま目標となつて、一生を送ります。

若し貴郎が怒りの余り、私をお殺しになると言へば、私は笑つて貴郎の刃を受けます。^{にこやか}莞爾な顔で殺されて行きます。今の私の生命を奪われた方が嬉しく思ひます。貴方に^と奪らるゝ生命ならば更に嬉しく思ひます。

(略)

(⑤「暗い途に（再び蔦枝より）」)

自らの罪の深さ、謝罪の念、遺憾の念を、「呪」「殺」「怒」「刃」というおどろおどろしい語を用いて表現しながらも、相手の怒りや呪いを喜んで受け入れると述べている。少々狂気じみた叙述であるが、気が狂うほどの遺憾・謝罪の念、また絶望感などが強調されている。なおそのような狂気を表現する際、文末をデスマス体で揃えることで、冷静さの中に狂気が存在するように見てとれ、かえって狂気が強調されている。

次の例は、書簡文冒頭から感情の誇張が見られる例である。都心から離れた淋しい土地で、年老いた病気の母親の面倒を見なければならず、自由の身になれない女性が、徐々に男性に心惹かれ、迷った挙句、ついに家を出る決心をしたということを男性に告げる書簡である。

【例 11】

私もうどうなつてもいいと思ひますわ。貴方にお目にかゝる度に私のハートは燃えて、どうする事も出来なくなりました。寂しい境遇から脱して、愛と希望に満ちた新しい生活にはいり度いと思ひますわ。

私にすべてを捨てさせる恋よ。

(略)

((④「避暑地にて (三信)」))

「もうどうなつてもいい」「ハートは燃えて」「どうする事も出来なくなる」「すべてを捨てさせる」という誇張を集中的に用い、何物も抗えない恋への情熱が表現されている。

次の例は、比喩は用いず、感情を直接的に1通の中で何度も反復している例である。怒りの感情を表す同じような意味の語句をくり返しているため、書簡文全体から女性の強い怒りの感情が溢れ出て来るような印象を抱く。【例 12】は、事情により、離れて暮らさねばならなくなった妻が、夫からの書簡の内容(「亭主なしの自由」と書かれていた)に対して怒りを書きつけた書簡である。

【例 12】

御手紙たしかに拝見いたしました。

酷い——余り酷すぎます。私の心も知らないで、私ほんとに口惜しい。もう——手紙を差上げまいと思ひました。(略/9行) あんまりです、あんまりです。私は死ぬ程焦れてゐても今行所がなくても、そんなことを言ふ人の所へは参りません。(略/1行) あゝくやしい、くやしい。もう——決して手紙どころか行きもしません。もう——着物も入いりません、(略/6行) 又、お出でになつても御目にかゝりませんから其つもりでゐて下さい。

十二月二十七日午前二時書く。

忘れられた妻

此手紙は片手に懷中電気を押へながら書いたのです。胸が張裂けるやうでくやしくつて眠れません。

((③「忘れられた妻より」))

次の例は、対句により、相手を思う気持ちを強調している例である。書簡の内容は【例 9】

と同様である。

【例 13】

(略)

二年の間は妾をお忘れください。貴郎が妾をお忘れになつても、妾は一分一秒時も貴郎をお忘れしません。

(略)

(⑥「入営を控へて」の返事)

「お忘れください」と「お忘れしません」、「二年の間」と「一分一秒時」とがそれぞれ対句になっている。またどのくらい相手を「忘れずに」いるかということを、たとえばはいえ、「いつも」や「ずっと」などの抽象的な表現でなく、数値を用いて強調している。

次の例は、列挙（列叙）による強調が集中して見られるものである。人妻である女性が外の男性と懇意になり、出奔を覚悟した。その出奔前日、相手（外の男性）に自分の罪深さについて、またいかに相手を愛しているかを綴った箇所である。

【例 14】

(略)

両親も、親類の人も、あちらの両親も兄弟も、それに続く親類も、どんなに私一人を恨み悲しませう。私は呪はれ、打たれ、粉微塵にされて、道端の泥の中へ、はふり出されなければなりません。それも怖くはないの、私はあなたを愛して居りますもの、名誉だの命だの、そんなもの何んで惜しいと思ひませう。

(略)

(⑦「冬野。あなただつて大変でせう」)

まず両親、親類、あちら（夫）の両親、兄弟、親族というように、「自分の回りの全ての関係者」を列挙することで被害の範囲の広さを示し、それらの恨みが全て自分に向けられるということを強調している。そして続く一文で、「呪はれ、打たれ、粉微塵にされ」という罪人を想起させるような負のイメージの語を畳みかけるように列挙し、自分の罪の意識を強調している。それを強調した後、「怖くない」と主張し、前に列挙した語と逆のイメージの「名誉」「命」という語を列挙し、それらを欲さないと述べている。「呪われ、打たれ、粉微塵にされ」という負のイメージを先に列挙することで、その後の「怖くない」、

「名誉や命など惜しくない」という気持ちが際立ち、いかに相手愛しているかということが強調されている。

同様に、列挙でも漸層を用いて感情の盛り上がりを効果的に表現している例もある。事情により、離れて暮らさねばならなくなった妻が、その状況を嘆きながらも夫を思う気持ちを綴った書簡文である。

【例 15】

(略)

あゝ、運命、みんな――運命の為す悪戯ですわねえ。考へれば考へる程、呪はれた二人の果敢ない運命が情けなくなつて参ります。馬鹿らしく腹立たしく遣瀬なく憤ろしくなつて参ります。

(略)

(③「人目を忍ぶ恋かのやうに」)

情けない→馬鹿らしい→腹立たしい→遣る瀬ない→憤ろしい、というように、短い語を連続してたたみかけている。徐々に感情の程度が強くなり、「呪はれた二人の果敢ない運命」を嘆いている様が強調されている。

3-2-2. 感嘆符「！」の使用

感嘆符は感情を強調して述べる際、他、気持ちの高揚した場面で用いられており、その場合は体言止めとともに用いられていることが多い。感嘆符を含む符号の使用は明治期の言文一致運動での翻訳体の影響とされており（山本（1971）、半沢（2021））、書簡文においても候文体では見られなかったものである。以下のような使用例が見られる。

【例 16】

(略)

私の今周囲には影法師――さびしい――影法師と私己だ。さびしい！ 涙がほろ――とこぼれました。

(略)

(③「果敢ない逢瀬」)

【例 17】

(略)

あゝ毎夜星は輝いても、貴君のお心は冷たくなつてしまった。

星は毎夜貴君の胸に恋を囁いても、既^もう甦^{なさけ}らぬ恋の情！

(略)

(④「何故いらつしやらないの」)

「！」が2つ用いられているものや、連続して用いられているものもあり、より強い感嘆が表現されている。

【例 18】

(略)

あはれなる女よ。あゝ、羞恥の極！！ けれども貴方は決してお笑ひ遊ばす様な方でない事を知りぬいてゐる。

(略)

(②「新しい女より」)

【例 19】

(略)

でも私はさめ切つて、反つて冷たくなり切つて居ると思ひます。

だつて夢ぢやありませんか！夢、夢！

さう思ふと私は何ともいへない淋しさを感じます。

(略)

(⑦「六月を送る。遠く隔てゝ」)

3-2-3. 感嘆詞の使用

感嘆詞は、これまでの例文にも見られているとおり、主には「あゝ」の使用が見られる。また、反復して用いられているものもある。感嘆符と同様、気持ちの盛り上がる箇所での使用が見られる。

【例 20】

(略)

あゝ、眼の前にひらけられた偉大な海、私はあの海の胸に抱かれて見度い。そこ

には大きな自然の恵みがありませう。朝な夕べに大空をうつして、果てしない波を漂はして……あゝ、懐かしい海。B 様。私はもう誰をか恨み、誰をか呪いませう。

(略)

(④「海をしたひて」)

【例 21】

(略)

夢でさへ此様に御憤りが深いものを、もしや御目に懸つたらと存じますと……あゝ、あゝ、この罪の恐しさ、この罪の身を何ういたしましたらよろしいでせう。

(略)

(③「この世の名残」)

書簡文冒頭から感嘆詞が用いられているものもある。強い気持ちの動揺が表現されている。

【例 22】

あゝ先生どうしませう……………どうしませう此心を、貴方に離れてずる――と遠い――所へ引かれて行きさうな此弱い心を、あゝ先生一体どうすれば良いでせうか？

(略)

(⑦「其第二信。離れ行く心」)

次の例は、書簡の最後の段落で 1 回のみ、使用が見られるものである。感嘆詞とともに用いられており、強い感嘆が表現されている。同じ職場の妻帯者である男性からアプローチをされ続け、自分も徐々に惹かれつつも良心の呵責から拒み続けていた女性が、何度目かの逢瀬で遂に男性からの求愛を受け入れてしまった。その翌日に男性に送ったものである。

【例 23】

(略)

何事も運命ですわ。

あゝ
吁！神様。

二人は幸福であり度い。

今夜もお目にかゝり度わ。

(④「何故来ません（四信）」)

3-3. 当事者意識の喚起、窮迫

3-3-1. 呼びかけの位置

呼びかけは、先述したように、親しさや親密感を生み出す効果があるが、当事者意識を喚起させたり、男性に気持ちを確かめようと迫ったりするとき、次の例のように使用がされている。

兄のように慕って3年間交際していた男性が、ある日の逢瀬の夜に酒を飲み、女性に対して、これまでにはなかったような非紳士的な行動を取った。その行動の真意を問いただす書簡である。書簡は全35行で構成されており、呼びかけは3回用いられている。3回中2回が真意を問いただす際（1回目と3回目の呼びかけ）に用いられている。

【例24】

金之助さま。

妾は貴郎の真個^{ほんとう}の御心が知りたいのです。貴郎と妾とは恰度三年間御交際を続けてゐます。(略／12行)

それが帰る次第には清々しくなつた胸に何だか曇りを覚えたやうなのです。

金之助さま。

昨日の朝、玉川に出掛けた時、又玉川で遊んでゐた間の貴郎は平常^{いつも}の親切な優しい貴郎でした。(略／10行)

金之助さま。

貴郎が昨日なされた事は御酒の上のお戯れでせうか。それとも御酒に仮りてなされたのでせうか、と申し上げると開き直つて何か貴郎に御議論でもするやうですが、左様ではないのです。若しあれが貴郎の真の御心から出たのであつて、御酒の上のお戯れでないとすると、妾は自分の考へを改めなければならないのです。

(略／1行)

(⑥「玉川の畔で（其一）」)

真意を問う前に相手の名を呼ぶことで、男性を問いから逃げられなくなるような気持ちに

させている。

3-3-2. 冒頭のインパクト

書簡文冒頭から当事者意識を喚起させ、男性に詰め寄るかのような表現が見られる。

次の例は、単刀直入に相手への問いかけから始まるものである。男性の目の前に女性が対峙し、迫り来るような感覚をもたらしめている。

【例 25】

どうなりますか、私達の運命は、何ももう分からなくなつて終わりましたが、何事も神さまにお任せませう。

(略)

(⑦「寒月、きつと守りませう」)

次の例は、冒頭から「あなたが」と、相手を焦点化した上で非難しているものである。主語に「は」でなく「が」を用いることで、主語に重きが置かれている。その後すぐさま自分の感情を短文で畳みかけるように列挙している。冒頭から当事者意識を強く喚起させ、書き手が読み手に迫り来るような勢いを生じさせている⁽⁶⁾。

【例 26】

あなたが、おひどいわ、あなたが御無理ですわ。唯驚きましたの。恐れましたの。恥ましたの。うろたへましたの。気が転倒しましたの。

(略)

(⑦「花吹雪。おひどいわ」)

3-4. 生々しさ、リアリティ

3-4-1. 未整理の文章

感情の乱れゆえ、書簡文として、整理のされないまま放たれたというものがある。

次の例は、相手を意識しての文章というよりは、自分の思考や感情を感情のままに書き散らし、羅列したように見えるものである。また通常の書簡文のように相手に問いかけたり訴えたりするというよりは、自分自身に問いかけたり神・仏に問いかけたりしている箇所もある。未整理ゆえに、混乱し、感情を取り乱している様子が表現されており、かえって生々しく感じられよう。

時おり、状況説明的な叙述はあるものの、挿辞を用いた最後の一行以外は、大部分がそ

の形体で書かれている。

【例 27】（全文）

ああ私は、何といふ恐ろしい夢を見たのでせう。酒の香の交つて居る熱い息が
頬にかゝつた時、私は何故もつと反抗しなかつたでせう。

あなたの片手が、妾のどつかを抱へた時、私は何故死力をつくして反抗しなかつたのかと今更思ひます、あゝ何といつたらよいでせう。

私は思ふだに、熱い涙が出ます。あの唇が額の辺から妾に近づく頃、妾は唯意識の混乱に悩殺される外、恰も酔ひ溺れたやうに、グツタリして居なければならなかつたのは、何んといふ情けない悪夢でせう。

それから体が急に引緊つて、不意に硬直を感じまして、恐るべきあなたの手から逃れて戸外に駆け出すまでは、全く無意識です。

放心して居ました。あなたの手から逃れて人心地に帰つた私は、其瞬間、世界が消滅して終つたやうな、絶望に陥りました。

どうしてよいか分からなくなつて終ひました。

あゝ、妾はもはや生きる値打ちのない女となつて終ひました。

あゝ、神さま、あゝ、仏様、詫びて済むことなら妾は詫びます。

泣いて済むことなら、妾は泣きます。どうぞ、此罪から救つて下さい—— 一体あなたは今後どうなさるといふのです——

（⑦「陰雨。恐ろしい夢」）

3-4-2. 形式・体裁の乱れ

次の例は、興奮のあまり気持ちが急いで書いたことや、女性の拙さが形式・体裁の不備に顕れているものである。少々意味の分かりにくい文や、一文が長すぎるため、いわゆる「ねじれ文」となっている文が多々見られる。また文末は、敬体を基調としながらも、時折女性系終助詞のない常体が混入している。ちなみにこの書簡文中には、「余りの奇遇で話も後や先きの乱れ勝なので急ぎ此の手紙を参らせた次第です。」とある。

幼い頃から憧れ、慕っていた意中のエリート男性が、進学のために上京することになった。貧しい村に住む純情な女性は、どうしても一目会って別れの挨拶を告げたく、男性が出発する船着き場まで、危険な運河を命がけて渡って駆けつけた。その後女性は淋しく過ごしていたが、17歳の春、男性に会いたいため東京の屋敷に奉公に出るという名目で上京を決意する。東京に行けば簡単に会えるものだと思っていたがそれも叶わず、男性に

手紙を書くも返事は来ず、悶々と2年半を過ごしていたある日、遂に偶然その男性との再会を果たす。その翌々日、まだ興奮冷めやらぬ状態で男性に書いた書簡である。男性を見送り、そして東京で再会するまでの長い経緯が綴られている。次の箇所は、男性を見送りに行った時のことを回想している箇所である。一文が長く、ねじれ文になっており、分かりにくい。

【例 28】

(略)

船が新宿の通ふ堀割の入口に着た時、あなた様を乗せるために走つて来る様な銚子発の通運丸は、悲しき汽笛を鳴らして宮原の船着場を後に上汐に乗つて船足を早めて新宿指して来るのを見た時私は思はず飛沫に濡れた舟に打伏して泣きました。

(略)

(⑤「多満さんの手紙」)

次の箇所は、上京したものの男性に会えず、悶々とした日々を送っていた時のことを回想している箇所である。【例 28】同様一文が長く、分かりにくい。また常体での文末の混入が見られる箇所である。

【例 29】

(略)

然し同じ都に住むからは、何時かは御逢ひする事が出来ると云ふは果敢ないが何処となく頼り処のある気のする望みは、何時も国に帰らうかしらと云ふ弱い心を鞭打つて、朝な夕な八百萬の神に祈りを捧げて、二年半を過ごした。

神の御引合せかあなた様に御目に懸り御別れしてからの積る話の幾分かを、御話しする事が出来ました。

(略)

(⑤「多満さんの手紙」)

2例とも、自分の目にしたもの、自分に起こったことなどを次々に書き連ね、その時その時のことを、体裁を整えたり文章を飾ったりする余裕や力量もなく急いで綴っているという印象を受ける。飾り気のなさや形式・体裁の不備に本人らしさが顕れており、リアリティが感じられよう。

3-5. 含み、恥じらい、ためらい、控えめながらも主張

3-5-1. 「…」(リーダー) や「——」(ダッシュ) の使用

リーダーやダッシュの使用はどの資料でも見られ、とくにリーダーの使用は非常に多く見られた。これらの符号は、先述した感嘆符同様、口語文体の書簡文において見られ始めている。リーダーの位置は、文中と文の末尾に見られるものが中心であるが、少数例として、文頭に使用されているものも見られた。

リーダーは、ためらいや感情の抑え、気持ちの溜め、沈黙、余韻などに使用されている。またこれまでの例文に見られているように、名前の呼びかけの後にも多くの使用が見られる。さらにリーダーを長く用いて「女の口から語れることではない」ほどの恥じらいを表す使用のされ方、ためらいや沈黙のあとに、思い切って重要なことを述べる時などの使用のされ方がある。リーダーは、最短で1回、最長では8回と長いものも見られた。

ダッシュは、挿辞法としての使用に加え、黙説としての使用も見られる。また、リーダーとダッシュを併用している例も見られた。

次の例は、ためらい・恥じらいの後に、自らの気持ちを思い切って述べる場面での使用例である。

【例 30】

(略)

それでゐて、何故東京へ帰らぬと決心したのでせう。それは……それは……矢張り貴郎が恋しいからです。貴郎が慕はしいからです。

(略)

(⑤「妾は背きます」(再び光代より))

次の例は、恥じらいの気持ちを余韻によって表現しており、書簡文の最後に使用がされている例である。

【例 31】

(略)

お目にかゝるのを恐れて居ます。何かそんな予覚が、私に初めて起つて参りました。でも、もう一度お目にかゝらせて下さい。

昼間は少し恥ずかしいけれども……

(⑦「水涸。堪忍して下さい」)

次の例は、女の自分の口からはとても語れるような内容でないという、強い恥じらいを長いリーダーで表現している例である。それほどのことを男性が行ったのだ、という、長い沈黙による男性への訴えのようにも見てとれる。書簡の内容は【例 24】と同じであり、男性の取った行動について回想する箇所である。

【例 32】

(略)

そして盃をお重ねになりました。妾が傍で心配申上げるのも構わずに……。

召しあがつてゐる中に、お顔は日よりも赤く見えました。息づかひま（ママ）苦しさうに見えました。妾はお苦しければ少し〇〇〇と申し上げたら、貴郎は……………。モウ止ませう。

(略)

(⑥「玉川の畔で（其一）」)

次の例は、リーダーで長い感情の溜めを表し、強い気持ちの籠りを表現しているものである。貧しい暮らしの中、うだつが上がらない夫に勉強をさせ、出世をさせるために、暫く家を出て実家に帰ることを決意した妻が、夫に残した書簡である。

【例 33】

(略)

前にも申上げます通り、後悔させるのも、喜ばせるのも貴方様の御勉強次第ですから、憎いと思召しましても、可愛いと御思ひあそばしても、御勉強なすつて下さいまし。

此事は綾が……………綾が……………一生……………一生の貴方様への御頼みでございます。

(略)

(③「切なる心」)

次の 2 例は、ダッシュが余韻や黙説として用いられている例である。前者では、冒頭のダッシュは挿辞として、それ以外は黙説として用いられている。

【例 34】（全文）

—— 来し方の余りにも吾に哀しければ —— もうおつしやらないで下さい。靖様、二人でお会いいたしましてから、—— あゝ、私があなたを知る事の大きいだけ、私の悲しみは、切実なものでした。では —— 短いお別れではございますが、さやうなら。

（①「哀しきまゝを」）

【例 35】

（略）

森田さん ——

暫らく大森へも出掛けられないから、此頃と一緒に行きませうよ。一日位舞台を休むだつて好いわ。

（略）

（⑥「歌劇の楽屋で 華子より」）

最後に、ダッシュとリーダーが併用されている例を挙げる。意中の男性に愛されているため、他人から妬まれるほどの幸せに満ちている気持ちを表現している箇所である。ダッシュ（挿辞）とリーダー（余韻）を用い、幸せであることを実感し、一人で静かに噛みしめているような印象をもたらしている。

【例 36】

（略）

あなたは御存じないでせうけれども、女は妬んだり、妬まれたりするのは命です。あゝ、なんて仕合せでせう —— 私仕合せでございます……………

（⑦「朧月。私の気は痛みません」）

3-5-3. 婉曲表現

婉曲表現は、「言にくいことを遠まわしに言う」（瀬戸（2002））ことであり、以下に紹介する2例は、婉曲表現を使用して、さりげなく相手の気持ちを問うたり自分の意思を伝えたりしているものである。

次の例は、【例 6】と同様の書簡文の中で、熱海に旅行中の女性が、交際している男性との関係を、『金色夜叉』の貫一とお宮にたとえ、自分の身を案じながら、男性にさりげなく結婚の意思を問うているものである。

【例 37】

(略)

紅葉山人がお書き遊ばされた『金色夜叉』は仮の物語でせうが、お宮と貫一と（ママ）別れのやうな事は多くの人が経験してゐる所ではないでせうか、妾も運命と云ふ悪戯ものに弄ばれてあんな事になりはしないでせうか、自分は飽迄そんな運命には反抗したいと思つてゐても遂それが出来ない事になりはしないか。思ひ悩むでゐる中、頬に熱い雫が伝はりました。

(略)

((⑥「熱海から」))

次の例は、東京を離れ田舎に暮らす女性が、意中の男性の暮らす東京に帰りたと思つており、男性に自身の去就について指示を仰ぐ書簡である。その指示を「指揮刀」とし、もし、男性からの指示がないのならば、東京へ帰るということをさり気なく伝えている。

【例 38】

(略)

S さま。

若し S さまが、指揮刀を御揮ひにならなければ、妾は妾の今の考へ通りに致します。稲荷の杜から響き渡つて来る太鼓の音は、妾に「東京に帰れ」と命令してゐるやうに聞えます。

……浅川の里には光代……

((⑤「稲荷まつり（光代より）」))

次の例は、【例 23】と同様の書簡で見られるものである。既婚男性からの求愛を、ついに受け入れてしまった、ということを婉曲的に表現している箇所である。少々後ろめたい気持ちもあるためか、自らの意志ではなく、（月の美しさのせいで）「降参してしまった」という含みを持たせている。

【例 39】

(略)

お月様がにくらしい。押へ押へて来た私の情熱を、私の恋心を^{そそ}唆つて、貴方の前に跪いてしまった。

(略)

(④「何故来ません」の「四信」)

3-5-2. 修辭疑問文の使用

疑問文を用い、率直に述べるのを避けながらも気持ちを主張しており、以下の2例のように、男性を非難する際の使用が多く見られる。

次の例は、音信が途絶えた意中の男性に、返信の来ないことを嘆き悲しみ、非難する箇所である。

【例 40】

(略)

何故、貴君は、私の春を呪ふやうな事をなすつて下さるんです。此の華やかな若い人に幸福を齎す春を、何故心ゆくばかり楽しめとは仰しやつて下さいませぬ。

(略)

(④「音信絶えし人に」)

次の例は、海へ一人で来た女性が、別れた男性に感傷の思いを綴っている箇所である。

【例 41】

(略)

故郷を遠くはなれて、淋しい此の渚に、一人世を呪ふ乙女を貴君はあはれと思召さぬか。

(略)

(④「海をしたひて」)

相手を非難しているようで、じつは相手への恋慕を表現しているものもある。正月の三日、意中の男性に会いたい気持ちを綴った箇所である。

【例 42】

(略)

あゝ懐かしい、悲しい、^{さび}恋しい、逢ひたい、何故あなたはこゝにゐて下さらない、何故抱へて常の涙を拭いて下さらない——私一人にもう此以上の物思ひは思ひ余りますわ——でももう一度お目にかゝらしてください。

(⑦「私の三ヶ日。燃ゆる思ひ」)

3-6. 迷い、男性への判断の委ね

3-6-1. 疑惑法の使用

疑惑法とは、佐藤（2006）では「ためらい・訂正」とされ、「情景や心理の描写、解釈、評価、行為など、選択と決断を伴うすべての意識現象において、複数の可能性の間で、どれをとるべきか躊躇する表現。トボス（定型的な論法）のひとつ。」と定義されている。本資料から例文を挙げると、「神さまは、まだこんなに私を護つて下さるかと感謝しながらも、亦疑ひました。」(⑦「大雪の夜。亦疑ひもしました」)のようなものであり、大抵は一通の中で部分的に使用がされている。

一方で、以下に挙げる2例は、それぞれ全体を通じて、もしくは一通の大部分に疑惑法が用いられているものである。自分の気持ちに迷いがある場合や、自分の意思を直接述べられない場合、迷いの気持ちを述べつつ、最終的には男性に「決めてもらう」ような叙述の仕方が見られる。

次の例は、一通全体を通して疑惑法が用いられている例である。書簡は【例 23】と同じ書き手による別の書簡である。男性からの求愛を受け入れる決心をしつつも、ためらいの気持ちも表現されている。

【例 43】（全文）

私どうしたらいいでせう。

貴方も随分思ひきつた事をなさるのね。お可愛相に奥さんをお出しになるなんて……私自分の罪が空恐ろしいございますわ。

けれど……けれど……もう何事も駄目です。此処まで事件が進んで来たら。

さうです。私も決心しませう。

けれど、矢張り私は一人で働いて居た方がよくはないでせうか。職業について自活して居た女は男の為に経済的独立心を奪はれるといふ事は一寸苦痛のやうな気もします。

兎に角お目にかゝつてからいろ——お話いたしませう。

(④「返事」)

一度は「決心」したものの、それが揺らぐような叙述をし、最終的に自分では決めず、未決定のまま話が終わっている。

次の例は、疑惑法を用いながらも、自分の望む結果（男性に「見捨てない」と決めさせる）になるよう、少々誘導が感じられるものである。意中の男性との恋のために家を捨てた時のことを想像し、自身の身を案じている箇所である。

【例 44】

（略／5行）

さうなつた時、あなたゞけは私を見捨てなくつて？ 唯一人でも、私の見方になつて下さつて？

あなたはきつとそうして下さいさる。

他の人とは違ふ。他の一切を振り捨てゝも、私の手を取つて、救けて下さる。

さういふ気がします。

けれどもそれは、私一人の思過しかも知れません。けれども私は、そう信じなくては、一刻も生きてゐられません。

そう信じない方なら。こんなに恋する事は出来ませんもの。

そう信じ抜いたからこそかういふ所へ来たのですもの。あなた、恐れてはいらつしやらなくつて？

此言葉を聞いて、もう私を可愛がるのは、お厭でなくつて？ 私をさうまで、可愛がつては下さらないでせう。

そんな危ないことまで犯して可愛がる程私は価値のある女ではないんですもの！

あゝ、私どうしませう……………

（⑦「露。私はどうなりませう」）

疑惑法を用いての話の筋を簡潔にまとめると、次のようになる。

相手を信頼し、「見捨てない」人だという→自分の思い過ごしかもしれない→それを打ち消すように、彼への信頼心を述べる→相手のことを少し疑う→危険を冒してまで愛される女ではないと自分を卑下し「どうしませう」と判断を委ねる

視点を変えて述べるならば、恋の駆け引きのようなものであるといえ、いわゆる「押し」と「引き」をくり返し、最後は「引き」で終わらせることで男性に追わせたり、庇護欲を掻き立てたりするよう仕向けているようにも思われる。

4. まとめ

以上、恋愛書簡文の持つ要素を6つの観点に分け、それぞれの要素において、それらを表現するために、様々な修辞・技巧が駆使されていることを示した。全体的には、口語文体の特徴がよく生かされ、女性が書き、「情を伝える」ということの可能性の拡がりが見てとれた。

口語文体でとくに可能になったことは、書き手の微妙なニュアンスまでも伝えられるようになったことである。具体的には文末表現の豊富さと技巧、符号の使用、呼びかけの使用⁽⁷⁾等に見てとれ、これらは旧来の候文体では不可能であったことである。中でもとくに新しく取り入れられた符号「…」は、当時の女性に特有の、男性に対する「恥じらい」や「ためらい」を表現するのに非常に有効な手法であったと思われる。また余韻という、恋愛書簡文特有の情緒を表現することも可能となった。

書簡文の部分でいうと、とくに「冒頭」の部分に、冒頭からの呼びかけ、感情の吐露、感嘆、問いかけなど、口語文体による恋愛書簡文ならではの新しい技巧が見られた。

それ以外の修辞については、修辞が組み合わされて使用されていること、それによりとくに「誇張・強意」が増幅されていること、その一方で、婉曲的に気持ちを伝えたり意思を主張したりすること、気持ちの揺れ動く様なども、技巧的で詳細に至るまでの表現がされていることを確認した。

また本文中では指摘をしてこなかったが、全体的に、難解な語の使用や時代の「先端」を意識したような外来語・流行語はほとんど見られず、一般的で分かりやすい語に、修辞・技巧を施すことで、「情熱的」な表現を生み出したり、心の機微を表現したりしているといえる。

本稿では、一通全体を通じての修辞・技巧について分析を試みることが出来なかった。それを次稿の課題に加えるとともに、次稿ではおもに、類似の資料や関連していると思われる資料、また前後の時代の資料等との比較を行いながら、本稿で示したような表現特徴が生じた経緯、各資料との関連性について考察したい。

付記：旧字体は新字体に改めた。また傍線は筆者による。

注

- (1) 『若き女の情愛手紙』には「情愛手紙と実用手紙との異なる点」として、「情愛手紙と実用手紙とはその内容や趣きを全然、異にして居ります。情愛手紙は自分の情愛を述べるといふのが目的でありますが実用手紙は余事はさて置いて自分の用事を達するといふのが目的であ

ります。」とある。

- (2) 掲載されている文例の多くは一般人同士での情愛を綴った書簡文であり、男女の恋愛書簡だけでなく、男女間での恋愛相談の書簡、同性間の友愛の書簡、親族間での情愛の書簡なども掲載されている。一部、芸者との書簡が掲載されている資料もある。文例の出典は主に3種あり①著者が創作したもの、②編者または著者が現物を集めた（と記載されているが、出典は示されておらず、その真偽は定かでない）ものや現物をベースに編者が少し手を加えたもの、③小説の中の書簡文や作家の書簡を集めたものがある。また②のうち、資料によっては、文例の後に個人名が記されているものも見られる。これはおそらく、明治中・後期から行われていた、雑誌への投稿書簡文からの選出と見られる。（以上茗荷（2023）より）

- (3) 文例の出自や創作性について、各資料以下のような言及がされている。

①	「本書に掲げた書簡文例のすべてに、その問題の上、材料選択の上には、多少の意を用いてゐる。」
②	「茲に永久に彼等の個性を示し且残すものに書簡がある。編者はこの意味に於いて現代の、若き男女の手紙を、大なる努力と苦心によつて集めて見た。即ち本書である。」
③	「私は永ひ間に蒐めた、活きた、生々しい材料を土台として、夫等の人々の境遇から身分から周囲の事情やりに、心から同感し同情し、其人の気分となつて如実に描かうと苦心しながら筆（ペン）を執つたのだ。そして、其人々の真実の叫びを読者へ再現しやうと努力したのだ。」
④	「今、若き男女の心をそのまゝに枝に鳴く小鳥よりもやすらかにたのしく、たつ糸遊（い）というよりもよりも尚ほかるゝかるやかに（ママ）綴る」
⑤	言及なし
⑥	「茲に集めた『愛の手紙』は私の知人□（判読不可）筐底に秘められたものを、借り集めて掲げたのであります、中には其文章に多少修飾を加へたものもありますが、多くは原文の儘で、その手紙を書いた人々の、悩み歎び、悶え、悲しみが文字の上に瞭々（ありあり）と現はれてゐます。」
⑦	「『ラブレター』私は此書を、私の青春の墓に葬りたい。しかし、此一編に含んだ感傷の夢は、年若い男女の方に対して、ある慰藉を与へるに相違はない。其儘反古にするのも残念だから、よろこんで書肆の注文に応じ、此小冊子を愛する、天下の若い人々に深謝する。」（「小序」）、「本書の材料は、いろ／＼の参考書より精選して、小冊子を形（かたづ）くれるものにして。——其出所を明記せざるは、簡潔を重んじたがためなり。」（「はしがき」）

- (4) 当時の「女性らしい」書簡文について、以下のような言及がある。「婦人の手紙の姿は、男子の手紙の姿と区別して、飽くまで婦人らしく認めるやうにしたいと思ふ。婦人らしくとは、全体の感じが如何にも婦人らしく、柔か味のあること、優しみのあること、その上淑やかな心根、奥ゆかしい人がらの偲ばれるやうに書くといふことに外ならぬ。」（『婦人よろづの手紙』）。
- (5) 長田（1918）に、「最近では西洋流の Dear Hashimoto なぞを倣つて、「橋本君」といきなり呼びかけて書くのが流行している。これは親しみがあつていゝ。」との言及がある。また管見の限りではあるが、候文体でも明治末期～大正期頃から少数の使用は見られている。
- (6) 「唯驚きましたの。」以下は、短い語句の反復による列挙がされており、効果としては「3-2-1」にも該当するが、「が」の機能を優先し、「3-3」の下位に示した。

(7) 呼びかけの使用は候文体でも見られるとはいえ欧文の影響のため、相性が良く、頻繁に用いられているのは口語文体の方である。

参考文献

- 桑田春風（1917）『婦人よろづの手紙』岡村書店
 佐藤信夫（2006）『レトリック事典』大修館書店
 瀬戸賢一（2002）『日本語のレトリック』岩波書店
 多恵春光（1919）『新しき婦人の手紙』日本評論社出版部
 橘豊（1977）『書簡作法の研究』風間書房
 手紙雑誌社編（1913）『若き人々の書ける 多情多恨の手紙』岡村書店
 長田幹彦（1918）『書簡文の準備』文芸研究叢書 第5編 春陽堂
 半沢幹一（2020）『近代表記の揺籃』笠間書院
 穂浪尚文（1916）『若き女の情愛手紙』岡本増進堂
 茗荷円（2017）『近代日本女性書簡文の表現史研究』おうふう
 ———（2023）「大正期情愛書簡文例集の研究序説——恋愛書簡文例集に注目して——」『共立女子大学文学部紀要』第69集
 山本正秀（1971）『言文一致の歴史論考』桜楓社